



早緑

第16号

2003年3月

ヨーロッパ研修旅行記

安部 彰

ヨーロッパ研修旅行は隔年の実施で五回目となる。医学・医療施設を訪問して外国文化を学ぶことが目的である。初めて夏季休暇中に実施でき、授業との関係や訪問国の気候などの面から大変に恵まれる環境での旅行となった。研修コースはM・RとNの二コースで、それぞれ四十名と二十九名の参加である。私は初めて引率者として参加する機会を得た。M科コースの紹介はこれまでにないのでその状況について少し詳しく述べてみる。

出 国

朝八時に名古屋空港二階しいの木広場に集合する。私は七時半ころ着いた。すでに二、三人の学生と看護学科の先生が来ていた。九月に入っても気温が高いのでほとんどは夏の服装である。学校からバスに乗った学生は十五分くらい前に到着した。二名の五分ほどの遅刻者を残し八時少し前に全員集合できた。ツーリスト職員が荷物名札、行ききの搭乗チケットを配った。荷物を三階ルフトハンザのチェツ

2003年3月25日

岐阜医療技術短期大学

紀要委員会 発行

関門市平賀字長峰 795-1

電話 0575-22-9401

印刷 (有) 志津印刷

目 次

ヨーロッパ研修旅行記

..... 安部 彰... 1

満天の星の山々へ

..... 相葉重雄... 8

いい人田中さん

..... 牧野和彦... 10

桜の花に魅せられる時

..... 高橋隆夫... 11

二〇〇二秋

看護学生のヨーロッパ
研修旅行に同行して
見た新たな発見

..... 高木繁子... 18



クインカウンターに預けて四階の会議室に入る。団長として私が出陣挨拶と旅行注意を簡単に述べた。ツーリストからの旅程説明、おみやげの手配などを済ませ、再び二階へ降り出国審査をして搭乗ゲート一階に降りる。学校へ出発の電話を入れて、機内搭乗バスに乗る。時間に余裕があるはずであったが、あわただしく機内の席についた。

飛行機(LH737)は定刻十時に離陸した。午後三時にミュンヘンに到着するまで十二時間の飛行だ。搭乗機はエアバスA340・300型、二七四人乗りであり、窓側は二人席であるのでジャンボ機に比べると快適である。ビデオ鑑賞、食事などで時間を費やし予定通りにフランクフルト(ライン・マイン空港)に着いた。エレベーターで入国審査の場所へ移動し、ここからNコースと別れるが、ツアーコンダクターの人とも別れるので不安の気持ちがあつた。日本から着いた団体客であふれ入国に時間がかかった。ミュンヘン行き(LH056)の出発まで時間がないが、すでに搭乗チケットが発行されていたのですぐに搭乗できた(九月二十日 金曜日)。

ミュンヘン到着

国内線は約一時間で着いた。荷物を受取って外に出ると、約束しである現地ツアーガイド小熊さんが待っていた。早速に荷物をバスに預ける。四十人分の荷物は大変な積み込み作業だ。バスに乗り込むとガイドの説明が始まる。バスの最前席は保険の関係で教員が座って下さい。旅行中の盗難事故は自分の責任において充分気を付けて下さい。など突然に厳しい説明が次々ととぶ。ああ大変な旅行だ。約一時間でミュンヘン中心街につく。バスを降りて夕食場所であるホフロイハウスに向かう。ノイエス・ラートハウス(新市庁舎)の

近くで十分くらい歩いた。街は週末であることと明日から始まるオクトーバーフェストで人が極めて多い。ホフロイハウスのビアホールで約二時間くらい楽しむ。ディルンドルという民族衣装に身を包んだ女性給仕が注文をとる。ビールはふつう一リッターのジョッキで出される。私は〇・五リッ

ターのバイツェンビアを注文する。白っぽい小麦ビールでアルコール分も低いそう。音楽、ダンスそして参加している客の国旗を揚げて歓迎してくれる。舞台の男性のひざまでの革ズボンとサスペンダーの姿がめずらしい。若い学生は長旅の疲れも知らず他の客と一緒にのっている。約束した私の友人も会いに来てくれた。ミュンヘンに在住するオーストリア人で一年ぶりの再会で嬉しかった。予定の時間はあつという間に過ぎ八時半に帰路のバスに戻る。

ホテルのあるランツベルグまで約一時間である。外気温は低く小寒い感じがする。ホテルはアメリカ風の清楚でこじんまりしている。ガイドの案内で各部屋のキーを受取る。カードキーであるがうまく操作ができない。長い機内の疲れと、時差で本当に眠い。風呂に入りすぐに寝る。



ミュンヘン新市庁舎前のオクトーバーフェスト準備風景

今回のドイツ旅行の地域は南ドイツ、バイエルン州である。首都はミュンヘンでアルプスを州で唯一擁し、郊外には田園風景が広がり、その美しい景観は最高である。翌日の二十一日(土)から三週間にわたって世界最大の民族祭といわれるオクトーバーフェストが催される。今年で百六十九回目を迎え世界中から七百万人の人々がやってくるという。ミュンヘンを中心に仮設テント張りのビアホールで、人々は飲んだり食べたり踊ったりする。期間中に五百万リツトルのビール、三十五万羽の若鶏が平らげられる。新市庁舎前のマリエン広場ではその準備がされていた(九月二十日 金曜日)。

ノイシュバーンシュタイン城

コール六時。食事六時四十五分。荷物七時に部屋から出す。七時半出発。また厳しいスケジュール。現地に到着して初めてハードなスケジュールが明かされる。ノイシュバーンシュタイン城を十時までに入らないとキャンセルされます。ガイドの指示がきつくとぶ。食事もあわただしく終え身の回りを整えた。学校へFAXを毎日送らなければならない。夕べ送るほうが良かったが夜も遅くなったし日本は深夜でもあることで朝送った。田舎街ではFAX回線も混んで送信に手間取る。

外国での最初の朝である。なにかと遅れて八時の出発となった。雨が次第に強く降ってくる。一時間ほどで城の麓にある村シュバンガウに到着する。日本人相手のみやげ店に寄りトイレを借りる。城まで歩いて二十分くらいかかるがバスに乗る。雨と雲で周りの風景は見えない。城で二十分くらい待って十時に入門した。日本人の団

体二・三グループと一緒にあった。城内のスピーカーから日本語の説明が始まる。他の外国人はトランシーバーで解説を聞いている。見学を終え城外に出たら雨はあがった。麓まで歩き昼食のためレストランに入る。向かい側の丘に黄色いホーエンシュバンガウ城が見えるし、食後一時間くらいのおんぴりと過ごせた美しい村である。ドイツで豚は幸運のシンボルとされている。小さな錫製の豚のオブジェを記念に買った。

ノイシュバーンシュタイン城はミュンヘンから百キロ南西にあり、バイエルン州国王ルートビヒ二世が一八六九年から十八年間かけて建て、湯水のようにお金を使って豪華に建てられたメルヘン城であり世界中から観光客が訪れる。通常の旅程ではこの近くのロマンチック街道始発点でもあり、保養地として有名なヒュッセンに宿泊するはずだがオクトーバーフェストで取れなかった。

ローテンブルグ

次に今日の宿泊地ローテンブルグに向かう。ロマンチック街道の高速道路(アウトバーン)を走って二五〇キロ先である。ドイツの高速道路は無料、速度制限なしである。国土縦横に伸びるアウトバーンのおかげで都市一局集中化が回避されているという。この地域は二車線だが、外側はバスなど百キロくらいで流れる。内側は百五十キロくらいであろうか、日本でも見かける性能の良い高級車が勢よく走っている。ロマンチック街道の風景は決してロマンチックでない。ドイツの観光政策でつくられた南北全長三五〇キロの道路だ。我々はこの旅行中にほぼ全長を走ることになる。途中のガソリンスタンドで小休止する。

ローテンブルグは中世に栄え城塞に囲まれた小さな街である。第二次世界大戦によって破壊したが見事に復興された。年間百万人と言われる観光客が訪れ、今も漂うドイツ中世の幻影に酔うといわれる。四時ころホテルに到着する。古い造りの街の風景にあったメルヘン的なホテル、ライヒス・キュッヘンマイスターに宿泊だ。早速部屋のキーを渡

され荷物を置いて街に出てガイドの説明を聞く。街を一周するに一時間とかならない。市庁舎を中心に歴史的な建造物の説明を聞いた。ホテルで夕食となり、安全な街ということで、夕食後の外出を許可される。しかしショウ・ウインドウは明るい店は完全に閉まっている。市庁舎近くにあるマイスター人形のからくり時計が九時に見れた。本当にドイツらしい美しい街だ。ぜひ、もう一泊したい。残念である(九月二十一日 土曜日)。

ハイデルベルグ

六時コール。六時半食事。七時荷物を部屋の外へ。七時十五分食事。八時出発である。今日もあわただしい。アウトバーンを走り、途中ロマンチック街道から西にそれて、十時半にハイデルベルグに



ローテンブルグの積み木のような建物

着く。

ハイデルベルグは一三八六年プファルツ選帝侯ルプレヒト一世によってドイツで最も古い大学が創立され学生の街として知られる。小高い丘にあるハイデルベルグ城に入場料を払って見学する。二十万リットルという地下のワインの大樽と、この番人だったという小人のペルオケの像に興味をそそぐ。私は特別にドイツ薬事博物館を覗かせてもらった。

日本人相手の免税店に入った。私は煙突掃除のくるみ割り人形とツビリングの鼻耳の毛切りを買った。街で煙突掃除夫に出会うと幸運がくると言われている。市内をバスで少し移動してレストランに入って昼食をする。



ハイデルベルグ城地下にある大樽番人のペルオケの像と学生たち

時間半ほどバスに乗り、四時半にホテル、マリタイムに到着する。小雨が降っている。今日の夕食はフリーである。六時半にロビーに集まって街へ出かける。大半のグループはホテル前にある中華レストランで食事をする。十時門限とする。この街は人口十二万の立派な都市である。一八二三年幕末の長崎にやって来て、日

本に近代科学を紹介し、また日本をヨーロッパに紹介した医師シーボルトもこの街の出身だ。そしてだるま型のビンに入ったフランケンワインが有名とか(九月二十二日 日曜日)。

ビュルツブルグ、レントゲン博物館

七時半コール。八時半荷物、食事。九時半出発。歩いてビュルツブルグ大学校内にあるレントゲン博物館へ向かう。別のガイドがつく。校内の一面に展示されたレントゲンに関する展示物を一時間くらい見る。レントゲンは一八八五年にX線を発見して、一九〇一年ノーベル物理学賞の第一回授賞者である。しばらくの間レントゲン博士の偉業に感激する。

その後、街を歩き前方に見える大きな宮殿レジデンツに向かう。レジデンツを背にすると前方は旧市街である。ノイ・ミュンスタール教会を裏口から入って見学する。教会の正面を出ると街の中心であり、マルクト(市場)付近に向かう。二時間くらいの自由時間となりその後食事をする。

食事をしてからバスでフランクフルト空港へ向かう。十七時の国内線(LH4072)に乗り一時間ほどでリヨンに着く。空港からバスでヒルトンホテルに向かう。このホテルは一九九六年G7サミットに使われた超近代的、豪華な建築である。ホテルで夕食をとった(九月二十三日 月曜日)。

リヨン、バイオメリー研究所

七時コール。八時荷物、食事。九時出発。ジナン・ケイコさんがガイドにつく。バスで三十分乗りバイオメリーに到着する。バスの

中までレミウスさんが迎えてくれた。幹部職のようだが、頂いた名刺に肩書きがない。この国で広報関係はOB役員の仕事とか。講堂に案内されて三十分会社の説明をスライドで受ける。フランス語をケイコさんが翻訳する。この会社は日本にも進出しており、細菌検査学の分野で世界的な会社である。ベクトンデッキンソン、アベンティスファーマ(旧ヘキスト)、パスツールメリーユなどの大企業をグループにして世界的な医療関連企業へと躍進が期待される。研究者の育成やユーザー研修に力を注いでいる。二グループに分かれて工場を見学する。

見学後、パーティ料理でもてなされた。食事をしながら会社のスタッフの方々と一時間くらい歓談した。今度来る時はぜひリヨンにゆくりすることや、日本の学校の制度などについて話がなされた。帰り際に学生達は会社の人と記念写真を何枚も撮るなど和やかな光景が続いた。

この後、パリへ向かうが十六時四十七分のTGV(TGV626)出発までリヨン旧市街をバスで見る。リヨンはパリから四〇〇キロ南に位置し、パリ、マルセイユに次ぐ大きな都市である。紡績工業はフランス随一を誇り、食通の天国と紹介されている。街が一望できる



リヨン、バイオメリー研究所でレミウスさんとの記念写真

フルピエールの丘にバスは向かった。この大聖堂に入りしばらく時間を過ごした。市街を通りリヨン駅に向かう。荷物を列車に積み込む手配をガイドさんがしてくれるのだが、数台のトロッコ一杯になる。私たちは発車の時間まで駅構内で約一時間待つ。ターミナル駅は少し不気味な感じもする。警官が怪しげな男のグループに質問する風景、黒人の親子があてもなく待ちぼうけしている風景など。

発車十分くらい前に列車がホームに入ってきた。赤いスタンドで切符にハサミをいれて乗り込む。フランス新幹線TGVはリヨンとパリ間四三〇キロを最高速度二七〇キロで走る。一九八一年にこれまで保持していた日本の新幹線の最高スピードを更新した。全車指定の二等車に乗るが日本のグリーン車ほどの大きなシートである。定刻に発車してパリのリヨン駅までの区間を二時間十分で走った。窓外は雄大な田園風景であるためかスピード感がない。駅に到着後、バスでシャルル・ドゴール空港近くにあるラディソンSASホテルに約一時間で着く。今日からここに二泊する。ホテルで夕食をとる。私たちが思うフランス料理と違う！大味(九月二十四日 火曜日)。

パリ、バスツール研究所

七時半コール、八時半荷物。九時半出発。食事は七時からとる。バイキング方式だが食べ物不足である。これがフランスだそうだ。バスツール研究所の見学は午後二時からだ。朝、セーヌ川のシテ島の東端にそびえたつノートルダム寺院に入る。ゴシック建築の代表でパリを象徴する巨大な寺院である。観光客でいっぱいであった。シャンゼリゼ通り、凱旋門、コンコルド広場、ルーブル美術館、エッフェル塔などをバスの中から見る。



パリ、バスツール研究所

所の地下には博士のお墓がある。二グループに別れて約一時間施設内を見学した。

研修旅程はこれですべて無事終了だ。再び街の中心、オペラ座近くのデパート「三越」前に戻り九時まで解散となる。四時間くらいだけの唯一の自由時間だ。私は免税の買い物このデパートと北方向にあるブランタン高島屋で済ませた。学生の多くは凱旋門に向かう。シャンゼリゼ通り方面三キロ先にあるブランド店などを目指して買い物したようである。全員が時間までに戻りバスでホテルに帰る。それぞれの部屋では親しいグループ達が集まり最後の楽しい夜が更けていった(九月二十五日 水曜日)。

食事をとってから、バスツール研究所に向かうが、パリ市街の中心を抜けた西北にある。バスツールは一八二二年に生誕した。二十四歳に科学者となり、微生物を発見して病気の予防に貢献した。酵母菌によるアルコールの生成を初めて発見したこと、五十五歳には動物の伝染病に関する研究や狂犬病ワクチンを発明した説明などを受けた。研究

帰 国

六時コール。七時荷物。七時十五分食事。八時出発。早い時間であるが帰国かと思うと苦にならない。

外は極めて寒い。昨日ミュンヘンに雪が降ったことを機内の新聞で知った。皆から五ユーロずつ集めたチップをガイドの小熊さんに渡し、旅行中の無事であったことに感謝する。十時五十分のフランクフルト経由(LH4117)で帰国するが、最後のユーロ出国であるので免税書類提出と出国手続きに時間を要した。フランクフルトに一時間ほど到着したが、出発が一時間遅れたので名古屋行き十三時五十分(LH736)にギリギリである。Nコースと合流して機内に入る。ここでおみやげの買い物を期待していたが予定が狂う(九月二十六日 火曜日)。

飛行機は予定通り翌日二十七日水曜日八時十五分に名古屋空港に着いた。全員六十九人が無事帰国したことを学校に報告して解散した(九月二十七日 水曜日)。

さいごに

旅行中は現地ガイドさんが極めて細かくスケジュールの指示や案内をしてくれるので引率者として大変に助かった。荷物もほとんど手にすることがない。団体旅行の醍醐味である。個人旅行ではこれだけの行程を決してこなさきれない。帰国してから旅行記や写真を整理していて、日程や詳しい情景が思い出せないくらいである。

気候、天候もまずまずであり、事故、病気も無く良い旅行であったと思う。

学生の意識は旅行に参加する前と変わって本当に参加して良かったと思う。

た、もう一度行きたい、と思う学生が多かった。ただし、移動時間にかかり過ぎたところがあり、旅行にゆとりがなかった。ホテルが不便な場所にあったなど再考したい点である。若い学生時代の外国旅行は私たちの時代では考えられなかったがいろんな面において将来役に立つことを期待する。

N科とR科の旅行記は「早緑」、梅原美智、十一号(一九九八)、四〜一四頁、山田 功、十二号(一九九九)、二〇〜二三頁にそれぞれ紹介されている。街のクリスマス情景やディナー風景などが楽しく書かれているが今回の趣と多少に異なる。



(あべ あきら 衛生技術学科)